鳥取県

「主体性を育む保育をめざして」

～縦割り保育から子どもの姿を学ぶ～

発表者
吉村 美和（良善幼稚園）
指導助言者
西山 智広（鳥取県教育委員会事務局 西部教育局 指導主事）
司会者
尾沢 知子（良善幼稚園）

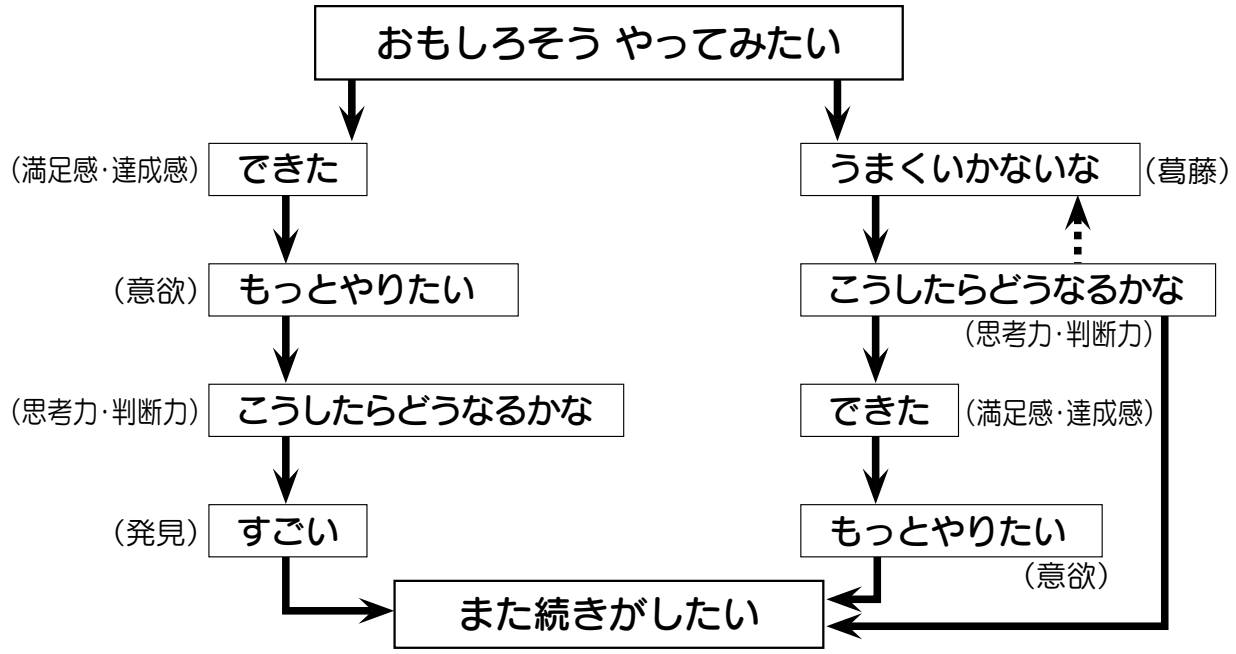
設定理由

（豊かな人間関係の中で過ごせるようにとの願いから）平成15年度より、保育形態を同年齢クラスから異年齢児混合クラス（縦割りクラス）に変更し、今年度で19年目となる。本園のキリスト教保育の理念である「一人一人が大切にされ、生かされる」ことを願い、互いが認め、認められる関係を日々経験することで大きな自信を持ち、心豊かな人として成長していけるのではと考えたからである。同年齢の中では自己発揮することが難しい子どもを異年齢の中で、自分を表出し、頼りにされ、役立ち感を感じることで、自己肯定感が高まり、次への意欲を持つことへと繋がっていく姿が多く見られた。

縦割りの生活だけでなく、同年齢の活動も行う中で、複数の職員が、一人に関わることになり、子どもたちの姿を多面的に捉えることができるようになるという良さも感じられた。しかし、異年齢で心地よく過ごす日々の中で、子どもたちの遊びの中に果たして主体性はあるのだろうか…と思うようになった。年下の子の面倒を見ることで満足しているが、その時期に、育まなければならないものが育っているだろうか。また、年上の人に身の回りのお世話をしてもらううちに、自分でできる力を持っているのにする機会を失い、伸びる力を見逃してしまっているのではないだろうか。遊びながら、不思議に思ったり、次はどうなるのか予想したり、繰り返し試したり、時には、友だちと相談したり、失敗や成功の経験がもっと必要なのではないか…等々。

そこで、日々の保育の中で、子どもたちが主体的に遊んでいるかを振り返ってみることにした。それぞれがクラス内の事例を持ち寄り、その時の教師の働きかけや、言葉かけ、環境の構成の工夫、さらに、再構成したりする中での子どもの育ちについて、職員みんなで話し合いを進めていった。

子どもが主体的に遊びだす時



いろいろな 子どもたちの心の動きに
教師はどう関わっていくべきか？

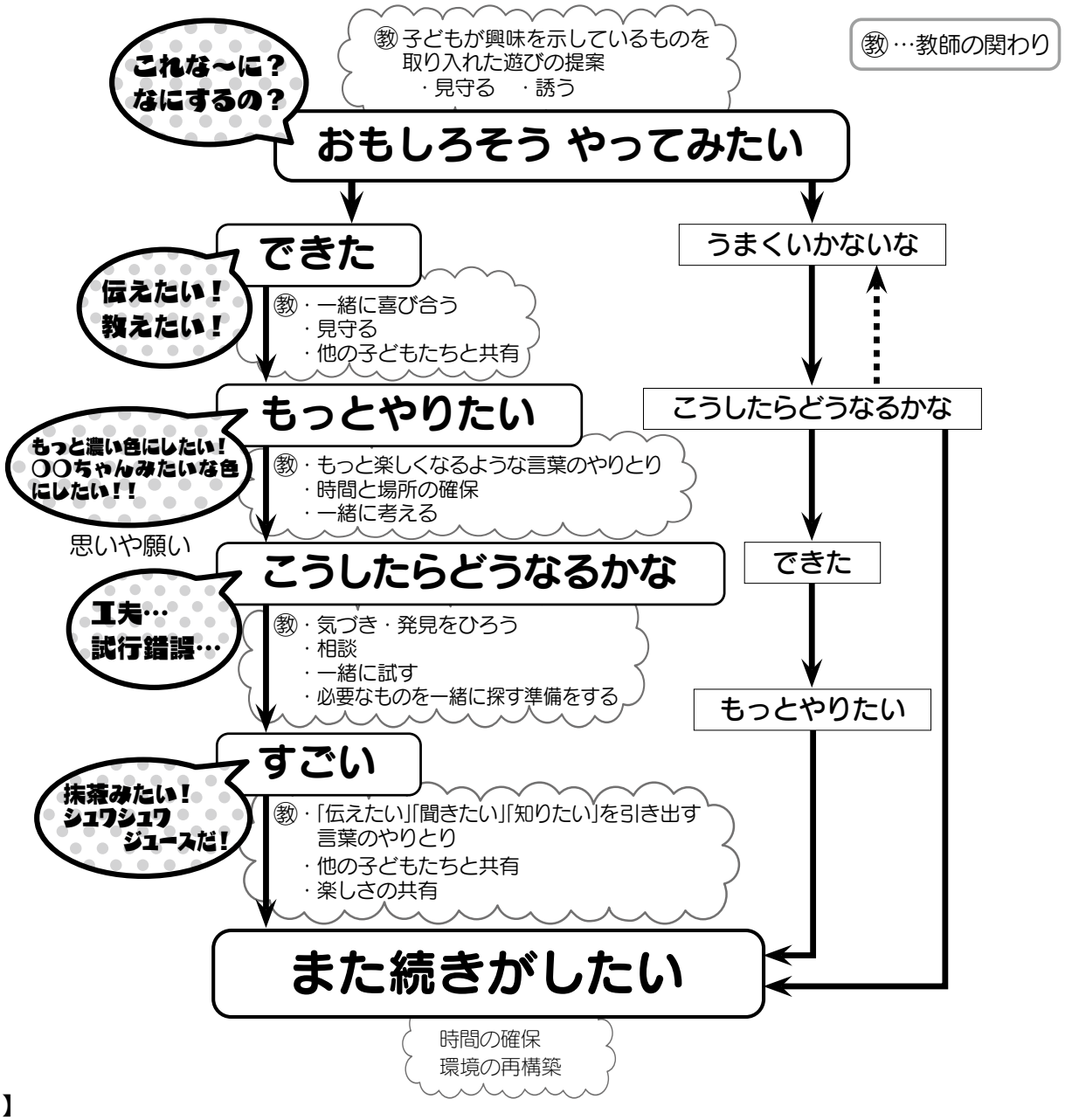
2つの事例を通して研究をすすめていくことにした

事例１

すいせん 組（3･4･5歳児クラス）　　活動名　色水遊び（4 ～ 6 月）

観点（　主体性　）視点（　意欲～おもしろそうだな～　）

主体的にあそび出す時の「子どもの心の動き」と「教師の関わり」



【考察】

中庭にコーナーを設置したことで子どもたちの目に留まりやすく、気持ちが動く環境となった。

いろいろなことに対して「やりたくない」と言っていた年中児、年長児もこの色水遊びをきっかけにほかの遊びでも「先生、これやってみたい。」と言うようになったことは大きな成長だった。

色水をしている子どもの中には、花や水の量をどれくらいにしたらよいかわからず、自分のイメージしていた色にならない子どももいた。しかし、「どうしたらいいか？」一緒に考えたり、周りの友達の様子を見たり、教えてもらったりしながら、最後は思い通りの色水ができた。うまくいかなかった時、やり方を教師が教えてしまうのではなく、子どもの思いや願いに寄り添うことであきらめず、子どもが自分から動き出したり、関わりを求めたりという姿に繋がった。

年度当初の姿を思うと子どもたちのほうから草花を探し、試し始める姿には驚いた。教師の想像を超え、興味を持ったことに対して自ら関わっていく姿へ変わっていった。

「あそこに行けば、色水ができる」と他クラスや２歳児クラスの子どもたちも自ら進んで、遊びに来るコーナーとなった。小さい子どもも作り方はよくわからなくてもとにかく、「楽しそう」「やってみたい」一心で動いている姿が見てとれた。そして、年上の子どもたちに教えてもらったり見て真似をししながら、何回かしていくうちにやり方もわかり、自分でできるようになる姿へと変わっていった。

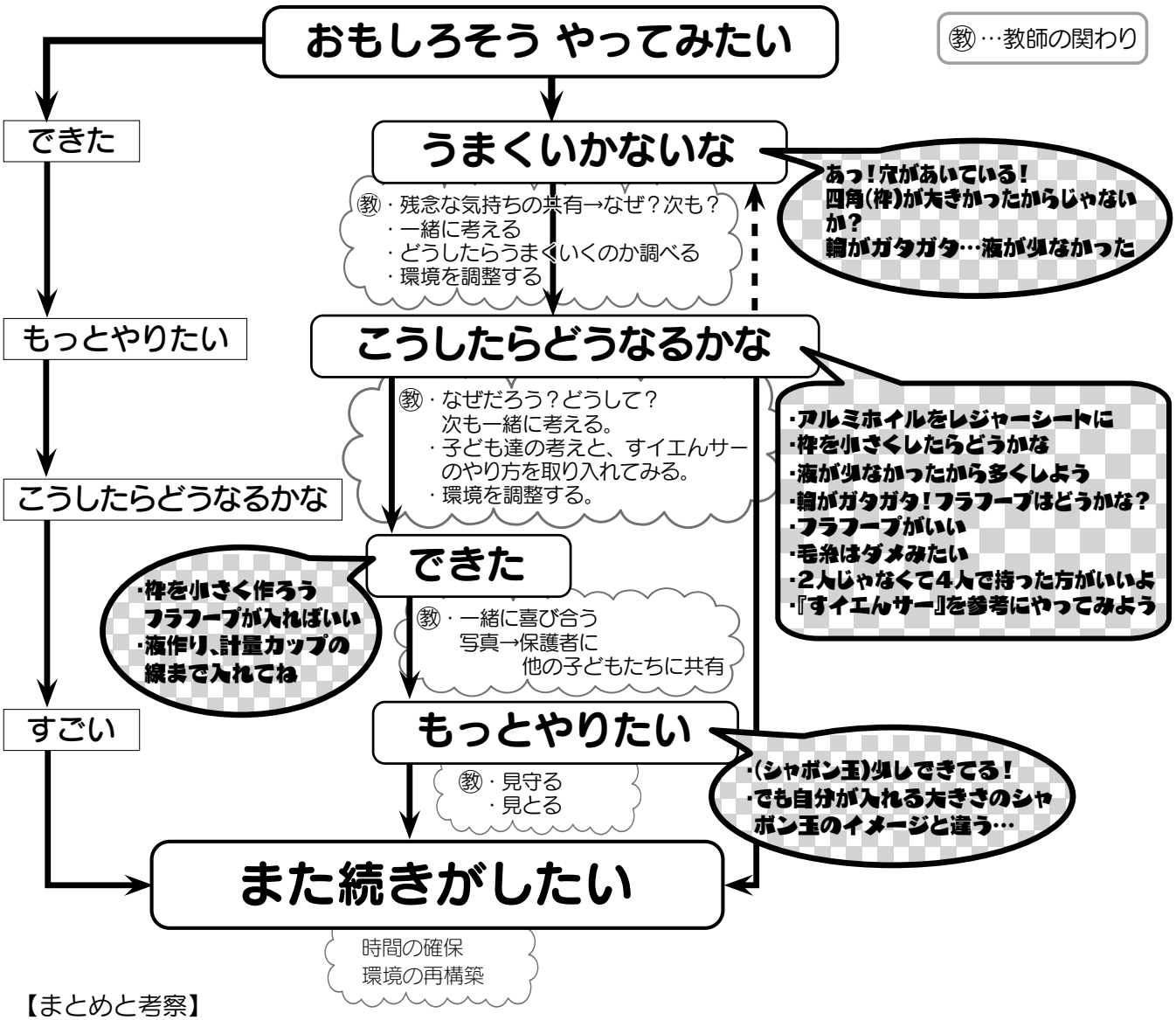
（異年齢児や友達から刺激を受け、自ら関わり合い育っていく姿は縦割り保育の良さであり、私たちの願いでもある。）

事例２

すずらん 組（３･４･５歳児クラス）　　活動名　**大きなシャボン玉作り**

観点（　主体性　）視点（　思考力の芽生え･協同性～やってみよう！～　）

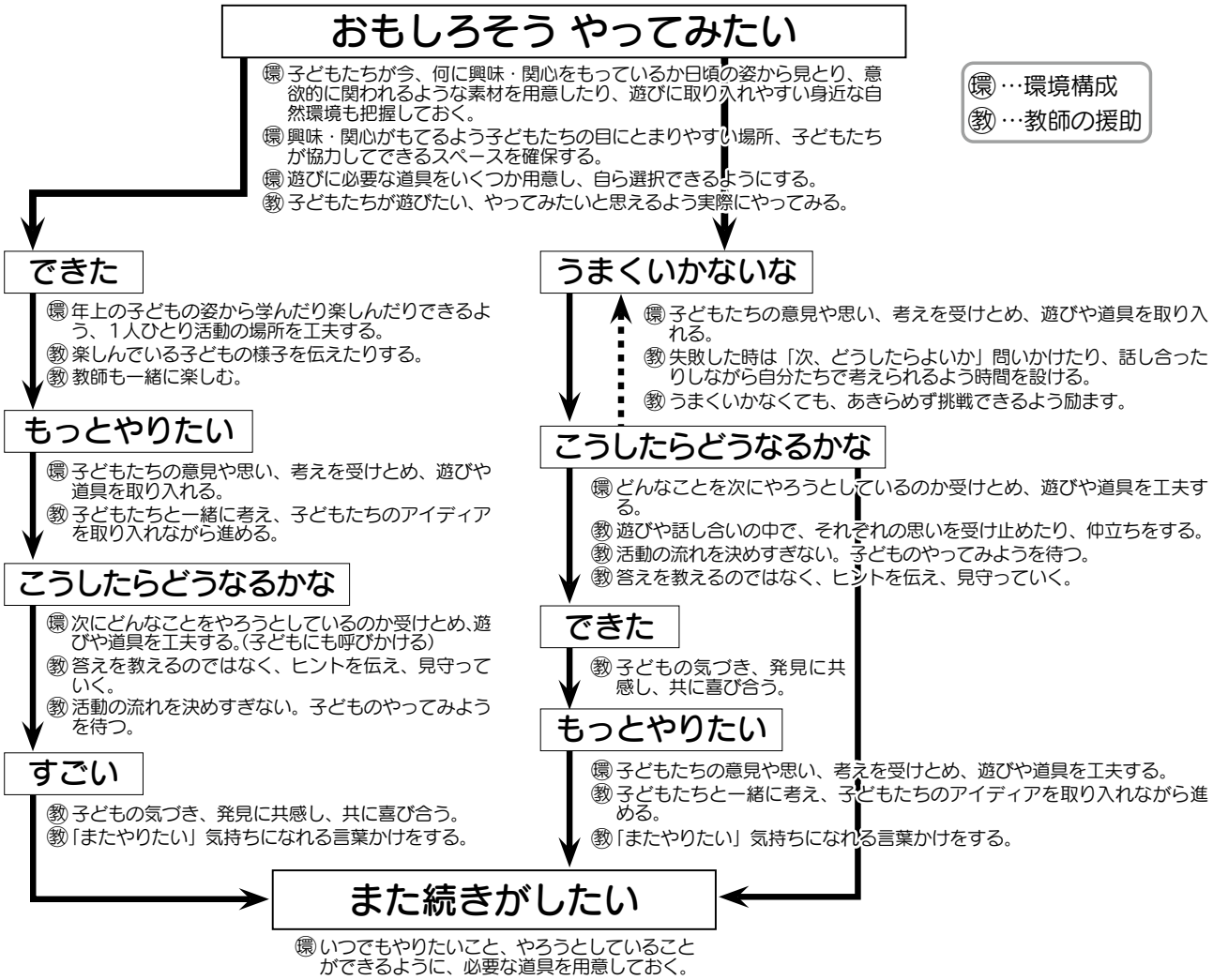
主体的にあそび出す時の「子どもの心の動き」と「教師の関わり」



【まとめと考察】

子どもとの何気ない会話から、長期間の取り組みに発展することとなった。クラス活動としての取り組みで、3学年が一緒に活動するが経験のちがいや興味関心のちがいから、少しずつ段階をふみながら進めてきた。子ども達が自ら試行錯誤しながらイメージするシャボン玉に近づくよう身近にあって使えるものを選んだ。また、失敗するたびにあきらめず、次はどうしたら良いのか話をしながら進めた。そうすることで、子ども達のやってみようとする気持ちを持続できたように思う。年長児の姿を見て年中児も刺激を受け、一緒にやってみたくなり初めは年長児の手伝い感覚でしていたことが回を重ねるごとに、自ら進んでできることが増えていった。役立ち感や楽しみ方がわかり、途中からは、大きなシャボン玉作りという、同じ目標に向かって楽しむことができた。年少児もまた、ゆっくりだが、状況がわかりだしてきてからは一緒にやってみたり、液を作ってみたりすることがおもしろい・楽しいと感じることができていたように思う。失敗するたびに子ども達から「アルミホイルは穴が開くからダメだった」「液が足りなかった」また、輪がガタガタでやりにくいことなどに気付いたことなどをその都度「そうかもしれないね」と教師も共感しながら、失敗の経験を共有し、一緒に学び楽しんできた。輪がしっかり液についていないとシャボン玉ができないことも教師は知っているのだが、子ども達の発見･気付きに「え～そうなの？」と知らないふりをしながら興味を刺激したり、家庭でも話題にあがるように、クラスだよりで活動の様子を伝えたり、ふり返りができるように活動の流れのわかるものを作成してきたことは、子ども達がイメージする、大きなシャボン玉の実現に向け、長く続けられたことにつながった。この活動から考える主体性としては、自分でやりたいと思い、あきらめずやってみようと取り組んだり、教師も働きかけながら、共にやってみようと楽しみ、そして、興味関心を持ち、させられている感じではなく、子ども達が進め、取り組めることと考える。

研究のまとめと課題



「主体性を育む保育をめざして」のテーマで子どもたちとの関わりを通して２つの事例や園内研修から研究を進めていく中で今回改めて気付けた事は、主体的に遊ぶ姿とは「自ら関わっていく力を発揮している姿」「人との関わりを通して発揮される姿」であるということである。遊びを通して、いろいろな環境に対し、興味・関心を持ち、自ら関わろうとする力は心を動かし、自己発揮する楽しさを味わったり、自分で思いついたアイディアや考えを実現するためには、時には試行錯誤しながらもしっかりと遊びこみ、達成感、充実感を味わっていた。そこには友達や教師との関わりから育まれることもたくさんある。初めは興味が持てなかった事でも教師と一緒にやってみることでできた喜びを味わい、自信が持てるようになったり、周りの子どもたちが楽しく遊んでいる様子をみて心を動かされ、遊びの幅がひろがったりもする。又、自分では思いつかなかった事も一緒に遊び、思いや考えを共有する中で遊びのイメージがふくらみ、新しい発見につながっていく。

いろいろな環境にしっかりと関わり、経験したことは一人一人の力となり、遊びや毎日の生活の中でも発揮できる『主体性』を育むことへつながっていくのではないだろうか。たとえ上手くいかないことがあっても「次はどうしたらよいか？」考えてみること、自立心や人と関わる力、思考力の基礎となるもの表現力、言葉の獲得にもつながっていくのではと考える。そのためにも私たち教師は子どもたちの様々な心の動きを、丁寧に見とり、日々の保育を振り返り、「こう関わったことで子どもたちがこう動いた」と自分自身に問いかけ、次に何を環境構成をし、援助していくのか？考えていくことが大切である。子ども主体であってもけしてまかせきりや無計画ではなく「主体性を育むために」この遊びを通して何を育てたいか？どんなことを経験してほしいか？意図やねらいを持って環境構成をし、援助していくこと、そこに私たち教師の大きな学びがあるのではないだろうか。

今後の課題について

～各クラスの実践を基に環境構成、教師の援助についてまとめた今後の課題～

① 子どもたちが「楽しそう」「やってみたい」と思えるような遊びの環境と援助

② たっぷりと遊びこめる時間、場所の保障と心動かされる素材、用具の工夫と援助

③ 異年齢児や周りの友達の姿をみて刺激し合い、考えたり、工夫できる環境構成と援助